



秩父三峰越え元

一、雁坂峠

雁坂のともすれば絶え勝ちなる峠路を生え茂る熊笹を分けて登ることしばし。喘ぎ苦しみ登る我が抜た遠く神ながら雪置く崇き富士は浮びさながら疲れ弱りたる吾を励ます友の心のこと。登り終りほつと息つくときその姿は最早見得られなかつた。

その紅葉を競ふ錦の海。日は谷間に僅かに小さく霞んでだんだん映ひゆ仙境と見とれてゐた。人の住む山里の小さな里と里との間それは雁坂は今までそうであつたが。唯その土地大古から住む人の知るそして又時たま三峯の社た詣である信心のかよふ古い峠。

會報 第六年第号

昭和十年一月一日

(圖卷第四十二号)

金峯より雲取まで秩父の奥に峯をおこす幾十、迷々と脈打つこの高山を或は東から西或ひは北から南へと切る峠は無数。峯は如何に高く攀えようともそれは自然の冷き姿。山の中峠路にのみ人の暖き血の動悸は聞える。旅人はひとり通ふ人稀なる峠路を静かに己が影を踏み己が過ぎ行く道を見つめて過ぎ去りし人のふみ固めし峠路を越えて行く。峠の上に立ちて一步北大進めば南の廣瀬に較べて鬱蒼たる黒き針葉樹の苔蒸す寂境。郭公の声さへ寂びて聞える。道を孫四郎峠より左川水源への急斜をひたむきに降る。橋木落ち道は壊れ鞍度か轉びつゝ無人の柳小舎についたのは三時。秋の日は既に谷の底なる小舎を去り僅かに背後の尾根の頂きを輝かしてゐた。

二、十文字峠

小舎の前大落ちる瀧の音にひとりよもすがら枕をかびやかされまんじりとむせぬ中に夜は明け離れゆくひの空は相成らずの日本晴。勇む心に山人のいつもながらの味噌汁に舌鼓を打つて一度尾根に登れば今日一日の履の用意も忽ちに終る。燈き風は心地よい。時々うしろに見えし白岩を流

笠取なども、峠近くの森林に入れないと登りは極くゆるい。坂の両側は深い森林。はじめは驚れをさかのぼつてゐたのだつたが、いつのまにかとほなしにもう流れを下つてゐる。いふべきは感じが違ふかも知れないけれども、でも木に攀ぢて赤糸、繩名、妙義の三山を初め遠くの頂きの感じはあつた。

峠を下り、一步森林を駆け入る。かつては日本一と称へられしあの白樺の古木の繁茂のために惜しげもなくすべて一塊の炭と變へられ、却へと遠く運ばれてしまつた。併しこの白樺の若木は或ひは親木の根より或ひは谷間に大生々と歎然と歎びに満ちて育て居る。幾十年かの後、幾百年かの後、雨び昔のせんじ

三、粹山大丁

三、梓山大河

梓山。山入大取りて。梓しなる語は何となく
なつかしい。信濃の秋を未は越後の荒海に注ぐ。
犀川の二つの流れに分たれる。その犀川本安曇の
野に一は高瀬。一は梓川となり樽ヶ岳の下に再
武信嶽の東に入る。その源を梓川といふ。その名
の共に同じたる何の偶然。一の梓川は千古不滅
の雪に初まり。城々たる穂高の下。神の河内を過
ぎて流る。一の梓川は千古不谷の苔蒸す甲。武信嶽
の針葉樹より出でて。静かなる梓山、佐久の里を
の何の因縁。而して又同じ峯甲。武信嶽より南に落
べてこの千曲水源梓川の流れの緩かにして女
の性的なるを見ると。その土地々々のその國々
の。その人々の氣質の中にこれに似たものが見
出される様な気がした。

梓山。古き宿に今は七キ山の友の今は遠く
分かれ学ぶ友の年若く地大なるも思ふことなく
夫に旅のたのしさつらさを味はひし山の彼らの
名を見出してひとりよろこぶ。への子供。母な

る大地より生れて人格を自由を名聲を求めて
世に苦しむ。しかしこいかは神ならぬ身の再
び母なる大地に還る。一年の後。十年の後。すや
ては天命。吾知らず。

四、信州峠

千曲の流れより分かれて三里。黄葉の白樺の林
の中を道は羊腸と続く。葉の半ば散り落ちたる白
樺の間を鳥の聲もなき水の音さへ聞えぬ高原を
僅かに踏む落葉のざわめきと共に遠く山あひだ
らかな峠路を歩けて行く。

寂境を求めて孤狼を求めてひとり山に入る
きさへ怖れてそれほんの剣つくりこの心。
かよふ道から離れようとしている。山の頂き
をさへ喜ぶ心。いや彼等と共に駆け下りる
起居を共にすることをさへ喜ぶ心。いざ
に永久に其處に住みたい衝動にかられることさへ
ある吾。頂に峠に休むとき峰を谷を歩むとき
常に自己のそしてそれを取り巻く人生の社會
のすがた。矛盾の不安のそのすがたはとぎれ
とぎれにそれでも絶えず吾が心に浮び漂ふ。
かゝる旅人の自然歎美、自然禮讚は「安価な幼稚

手に瑞穂、金峰の山々が重りつゞき聲々。雁坂は
南は開けた草地 北は深い森林だつた。十文字峠
は登りも下りも深い森林だつた。然るにこの信州
とキ暗雲低迷して遠望の味を味はふことは出
来なかつたけれども 雪の頃再び訪れんことを
大書き僅かに吾と吾をなぐやめて 下り路へと
足を運んだのであつた。

(クン) (八月 10)

Botley-Winchester-Bournemouth-Dorchester
—Exeter.

Oct. 3.

起きてると又雨だ。クサツと終る。何とか、かん
とか、片附けて、朝食を済して船で出駆け様と、
Carを調べて見ると、Cooling-water の stopper
がカントンになつて居つて動かね。Garage は Oil
を入れる席だ、火をたき開ける、ナントカ、カ
ンとかしてゐる中に、九時近くになつたが、一日の
滞在でウンザリしたのを Botley を去る事がとても
嬉しかつた。Winchester は一理だ、main
road がないから注意して行く。途中で雨が止つ
た。気のせいか engine の調子が何処かエンジン
の様であるが、走り角 speed はよく出るし start

も accela もオカしい所はないのが Winchester
の町に乗り入れる。古い寺院町の事と恐ろしく
狭い通の上に、急な曲り角があり、坂があり恐ろ
しい町だつた。兔の角無事に Cathedral へ着いた
と思つたら間違ひで別の教会だつた。が、Cathed-
ral は遠くもないし、一度都へのある Car park
があるので、6d. 持つて Camera とレーハー
をもつて歩いて行く。スケートリーフル Service
having commenced, visitors are now allowed
to walk around 2分間 Notice board に立つて
ある。折よく表かへつた坊ちゃんは、11.00 分許
りから、るから、その間に英國最古の Public School
「富豪、上階を級の子弟の行く、中、高等学校」
たる、Winchester College を見て来たらと言ふ
のを道を聞いて行くと見ると 10.30 にならなければ
ば見せられぬと言ふ、もう Exton を見てゐる事だしこ
と思つて遂にこの方は断念して Cathedral 見物に
家がある。古い城壁穴を開けて住居に改造し
花が咲き乱れてゐる、Cathedral の service が終つて
夫のか、Chime のカランカランと音が静
かな朝の空氣を傳つて来る。(却つて情緒が漂つ
てゐと言ふのだ)、一寸淋しい様な静かな街だ、

York の街を思ひ出した。大が側を川が流れて居り、そこには一面の緑の芝生がひろがつてゐる。その間に桜の木は大概一本一本ハナレバナレ大生えて居るのである。あのよく本ハナレバナレ大生えて居るのである。あのよく英國の風景画にある奴で、picturesque と言ふ語がピツタリあてはまる風景がユル々カクチ傾斜がとても深い、鮮な強烈な緑の芝生で覆れて居り、その間に点々と濃い緑の針葉樹や、ソロノイ黄味がとどかつて来た桜の茂みやが散つてゐる。その蔭の辺りには、牛がチヨロ／＼しへる。とまあ書つた工合もあらんと思ふ。僕は York なりは、この町の方がいい、かも知らんと思ふ。唯 York の City wall が未だにか一々の attraction である。

Cathedral & precincts の静寂かな York のそれよりはダンチヒー、Cathedral の建築そのものは別に興味のない建物はツマラなかつた。唯デカイと思つて感心した丈である。何でも長い事で何年もかかる。Norman Tower や等は英國一なんだとか言ふ。Norman Tower や等があり古い所も相當に残つてゐる。精巧複雑な美術がないがデカくつて Cluny と monotonous な紹々四角張つて居るこの cathedral は英國式だ。と大角こう書つた調子で寺院を表して、car park

に来る。Bournemouth 行く道を聞いてから再び、car を動かし出す。いやな Drive で、神経を疲つて漸く郊外に出る。とてもいい気持だ。グレイとばして居る中に、路を遣へて終つた。次つて出直す。一寸骨だつた。一度 sign post を見てると、横から物凄い勢で car がとび出して来たのに驚いた。つやつたかなしと思つたが、思ひきつてグレイとハンドルを切つたら幸ひ綺麗に避けた。次は二度目の命拾ひである。この調子では命が十枚なければ足りない。が、聞いて見ると皆こう言ふ目にあつてゐらしい。先方も Hunt せず此方も Hunt せなんだが、branch road でヒビの corner なんだから危い話だ。路を違へて遂々 Southampton の郊外へ出て終ふ。フクソツタシ」と思つて居る中に、雨がチラツいて来やがる。殊本ない話だ。New Forest を通つて Bournemouth の Kine は癪快であつた。急いで日〇哩から五〇哩平均でトバしたので、風景は enjoy 出来なかつたが、兔大角、相當に素晴らしい mor であつた。風が横なぎに吹きやがつて夢中ツラかつたが drive の調子が出来ると、そつちの方に気をとられて終ふ。三台許り抜かれだ。初めは三〇哩以上は要らぬと思つてたが、結局一〇〇哩とまで

は行かぬもの、せめぐれへ。里でる car が欲しく
なる」 さて若君の気持が分る。Bournemouth
の町へ差かへつて來たら、ヒドイ降りになつて、
波水みたいでザザゾノ、車が音を立てよがる。お
負けにひどい混雑で、一尺行つては止り、二尺行
つては slow down と言ふ工合で油断もへキもな
りぬので夢中になつて居る中に、遂々 main road
を外れて終ふ。だから、大きな樹の中 S Drive
は厭だ。実際神経を使ふ事甚しい。お負けによく
道を失ふ。ヒドい雨で特にセロ界になつて居たの
で、少し人通りの少い所へ来て car を止めて、地
図を案じて一服ツけてから又のり出すとやち城町
の中へ乗り込んだ。散々の体である。又と main
road らしいのを見つけて Dorchester 行く途を
聞くと、「こゝは Park でお前は main road に
あるんだ」とおはれて。雨はヒド
Dorchester でヒドイ雨なので、一先づ休んで晝飯
を食ひ給へと 1/2 ハーフで Restaurant の前で下して
やると恐縮して雨の中に立つてゐる、ガソリンの
補給の為に車を廻して Garage へから、街の真
中にある古ぼけた Hotel へ入つて行つて晝飯を食
つた。ヒドイ降りでグショ濡れだが、毛唐つて奴
は寒い事を知らぬ。平気でノコノコ歩いてる奴が
ある。何言つてもエネルギーの点では毛唐が絶
対に優れてる。又は大切な事で、日本で一番等閑
向つて走つてゐる。Sussex 這とはスッカリ違ひ、

Hampshire オリモモツと人気がない。一寸武藏
野に似てる。が、恐らくそれよりももつと人気が
ないんぢやないか知ら。兎に角あの Gabriel Oak
と Bathsheba Everdene の話を想ひ出しきら、雨
の中を drive して行く。と、途中でヒドイ雨に濡
れやら歩ひてろ男が手をあがた。氣の毒に思つて
pick up してやる。とガタ～かるえでる。ヒド
イ Cockney で、イアス、イアスと言ふ。よく今
事を言ふが、何でも今朝 Bournemouth でお茶をの
んだきりであると言ふ。London から Plymouth ま
で、少し人通りの少い所へ来て car を止めて、地
図を案じて一服ツけてから又のり出すとやち城町
の中だからと思つて Dorchester 送のせてやる、
心の事だからと思つて Dorchester でヒドイ雨なので、一先づ休んで晝飯
を食ひ給へと 1/2 ハーフで Restaurant の前で下して
やると恐縮して雨の中に立つてゐる、ガソリンの
補給の為に車を廻して Garage へから、街の真
中にある古ぼけた Hotel へ入つて行つて晝飯を食
つた。ヒドイ降りでグショ濡れだが、毛唐つて奴
は寒い事を知らぬ。平気でノコノコ歩いてる奴が
ある。何言つてもエネルギーの点では毛唐が絶
対に優れてる。又は大切な事で、日本で一番等閑

第一號
針葉樹會報

に附されてゐるのは、機歟と精力と吉示点であらうとは何時も思ふ事である。

文中に Thomas Hardy & museum が何かなにかと聞くと「オタこの印度人は英語を話すわいし」と言つた額をして、イヤ statue が人々が先の四角にあら丈で、生れた家や、死んだ家は少し遠いと答へる。それで折角の Hardy は断念する。この文中この會訪で lunch と言ふ語を二、三回繰返させられた。どこがオカシイのかよく分らんが、何時も lunch を呑れと言ふ時には話が通せず、二、三回クリ返させられる。一つには、英語の聲音で奴が如何に大歎しいか分ると全時に、英國人の察しの悪さ加減が分らうと言ふものだ。兎に角このランチを食つて、ヘタ／＼疲れた神経を休め、濃いコーヒーで神経を refresh してから car へ来てみて来て見ると、南無三、door の glass を閉め忘れて置いたので雨が降り込んでも。それ丈ならよいが、seat に腰を下すと傾斜がついて、ガラスをピッタリ向めつけて置いて動き出しだが、例よりすぐ前大デカイ車が止つて居り、ハト／＼開口したが、ヒドくなつて来て、れつかり川の中を drive して

る様だ、危くって仕様がないが、時間の余裕もない。
statue もへッタくれもこの雨では、用が無い。
wiper を動かしてがらスをふきながら drive すると
「スグに街を外れた、幸にして道は Roman road
「ローマ軍用道路」で、マツ直ぐだから助かる。
三十分許りドライブして中止駅へ小止みになつ
て、シバラクする所と雨雲の切れ目とから。
降つてゐる所と雨雲を迂回して南に航をとりしとども言
ふ所だが、こちらは地上の道路を這あんだから仕
事當りつゝ意味が悪い位だつたが、Car の數が少
くなくつて意味が悪い位だつたが、Dorchester 以西
はもつとヒドい。實に關戦なもので、燃々鬪々と
した道路を四五十九哩でアーヴィングとトバスのは所よく
晴れた秋空の下に、起伏する線の Dorset の景色
を enjoy するにはモツテこいだ。だが又、誰か他の
の如き wine させて、ユツクリして、眺め廻すの
は緩やかな上り下りを続けて、ズーッと遙か西に
走つてゐる。先刻雨の中から遠かに眺めたあの山々は、もうソロく走つてゐる辺か知らん。辺り
の景色は雨上りのせいか、木ント大眼の覺める様

な、濃い緑だ。Buxton 辺とは違つて余程人口が
疎で、Church にしろ、人家にしろ、ソノビリとして
平和な落着をたへえて居る。good, old pieceful
Devon"。

この頃から朝からの連続の Drive の緊張がもたらした疲労が感じられて来た。Sidmouth へ出で泊らうかとも思つて兎だが、西々三十哩の事だと思つて、トバして居ると後からバスがブーブー fast down して終つたのだ、Bus に抜かれつて手はないんだが、仕方がない、おとなしく slow down してやらせる。小形の Private が、相當の坂をグイグイ上つて行きやがる。莫ッ乗れと思つたが、仕様がない、三万マイル走つてゐんだから。Exeter へ近づくと流石にケレシグ、car の数が増えて来る。愈々 Exeter の街へ入ると Winchester のそれの様なるどことなしに閑散な町で矢張り Devon の首府だと気がよくする。ウスデカイ Garage や Reed Hall 「今居る College の寮」へ行く道を開くと翁さん職工がとても丁寧大歎へてくれる。英國人は道を教へるのを大切だがよく分らないので、何時か二三回チガッタ人に聞くのだが、このディキンはまことに丁寧だったので、大体の見當がついた。古い町な

ので、道幅が狭い上に traffic が混んで居り、おまけに急な坂があるので、車を乗でない。兎に角、ゴトーやつて行く中々 motorists' Hotel と言ふ廣告が見つかつた。A. A. Book はないが、A. A. Listed とあるから、相當のものだらうと思つて、車をとめて入つて行くと恐ろしく薄氣で、ヒツンリ静まり返つてゐる。エエと思つたが、兎に角 Bell を ring して待つてると、これは又安達ヶ原のそれが、部屋を見せて呉れと詰みと二階へ案内する。Hotel と言つても完全な Private Hotel で、基場に続いた恐ろしい静な所にある。下宿度だ。が下宿にもなり兼ねると見えて、下宿人も居らずどうかと思つたが、ハバッともう面倒臭いので「O.K.」として sitting room に fine を起して貰つて tea にした。

Tea を済まして、三階の基場に面した小部屋に来て見るといりは暗くなりかけてシーンとした静な部屋にションボリと独りで居る自分の姿を見出した。

木立の姿勢の深さに関する

言ふまでもなく、木ッケの真意は前傾である。前傾は、腰と膝との屈曲で得られると普通に説明せられてゐる。然し僕は、前傾半蹴の屈曲のみに依つて得る筋が出来るのではないかと思ふのであって、膝及腰の屈曲は結局スピードに対する安定を博るためのものではないかと考へるのである。従つて木ッケの深さを左右する膝及腰の屈曲は前傾のため大重要なものではなくしてスピードに対する安定を得るものとして意味のあるものと考へられる説である。即ち傾斜度へとは大体スピードと考へて得る）の大小と前傾度の大小と安定度大小と考察へ得る）の大小と前傾度の大小と安定度大小としての木ッケの深さの深浅と言ふ事となる説である。

所で低い姿勢へ換言すれば深い木ッケ）は足の運動の変化に対する上体の適應を困難ならしめる運びである。例へば急に傾斜がゆるくなつてみてしめられてゐると、いふ様な所ではそして雪が堅く踏みかた有するといふ様な所ではそして雪が堅く踏みかたBゲレンデ、ジヤンブ台に向つて右の斜面を見らざれる——今迄の深い木ッケでは非常に不安定を感じるのである。此の如き足部の運動の変化に対する

西遊記

朝の大津駅に高瀬と二人、シグナルの波方にほ
つゝり浮んだ下り急行七号列車は近藤と恩へば理
に見えながら滑り込んで来た。窓から窓を探して
大きな笑ひ声を震り向くどもう立つてゐる、謙、
近、ペンの三人だ。浜へ大津の街を歩く。一俺達
を何処へ連れて行くかちやんと分つてゐるんだか
らしと近藤の眼のこわい事・風呂敷から菓子折を

も上体の適度の容易さと言ふ点を考慮に入れる時は
姿勢は高い方が——浅い木ッケが——より良い様に
思はれる。従つて結論としてはスピードに対する
安定度が許す限り木ッケは浅い方がよい様に思は
れるのである。此は結局木ッケの深さは二つの安
定要素に依つて定まるといふ事になる訳である。
以上は昨年からの疑問であつて、物理的でも何
的でもない、自分の感じから出て来た所でありま
すから、勿論自分はこういふ感じがするといふに
過ぎません。今年も一生懸命研究して見度いと思
つて居ります。皆様の御指導を得度く恩ひ切つて
書いて見ました。尚此の点に就ては松木さんとの滑
降姿勢に考へさせられる所があると思つて居ります。

一つ出して又あとをちやんと包む謙。後になり光
くなりもう何か始めてゐるペン。汽車本長い程元
気くなる波等だ。

船着場にて持つ程太田、五十嵐、高木と関西
方も集つた。平安丸は十時出帆、それまでは特
別室だよしと喜んでゐた近藤が急におとなしくな
つた。祖先の苦き経験はそのまま、この族の習性と
なりしにや。とまれ謙、ペンの喜びを乗せ、朝の
光に包まれて乗津を過ぎ、想ひは瀬田の夫婦橋をの
潜つて船本南郷で水分の上陸となつた。上陸と聞
いて近藤が渡した板も何のその十九貫な大がしひの
質量を躍らして岸に飛び付いたのも凄かつたけれ
ど、草の上に横くなつて見上げたときの近藤の
カラ一で頸と背中とを僅かに分けて後姿は、近來
めつきりどころか見馴れた目に分けてもこわかつた。
先齒と共に船は石山へ。目もあやかな紅葉と
石段を登つて石山寺。あれでも恥しさうに謙坊が
安産のお守を買ひました。船は湖を西と東に分け
て一直線、この間に今も寺の門前の鬼と食慾を覺
えたといふ謙坊お待ち兼ねの晝飯です。右には三
上山、伊吹は青く、左は巖山、比良は赤く、驚いて
立つ水嵩にも三勇士は満腹後の睡りを催す頃、
船は堅田に着きました。湖岸に並んだ白壁の村、

比良はカドミユームオレンジより鮮かに、鎮あけ
て日さし入れよ浮御堂をせめて跡など見る事にな
つた。

唐崎の松は船から横に、三井寺は割愛して坂本
より比叡、日枝神社は紅葉も今盛りで、菱形の箱
は視界をひろげてやがて終点。しつとり湿つた杉
を四明岳に登れば見える琵琶湖も、大津も、
京都の町も巨椋の池も。謙坊は「おおい静かに眠
る東山三十六峰つてのはどれだ、どれだ」と氣を
揉んであますが静かに眠るだけは余計です。ペン
は将門岩の上に立つてしきりに将門岩を探してゐ
ますがいちらしくて。暮れるに早い秋の日はもう
天地を銀ねずく染めて、八瀬から出町柳。近藤が
祇園行を両国行と読んだとて、大關が大内に見え
るんだから何の不思議もあらばこそ、行先はトン
ちやん博意の瓢亭なり。京の沓高き四の数々、夜
の更けるも忘れけり。

睡眠中の性癖の様々から並ぶ順序はくじでさめ、
無事に一夜を上賀茂なる五十嵐宅に過した一同は、
早朝十合の参加大喜びを新たにして大原へ。寂光
院ではペン公が「汀の池」を「けのいけ」と読ん
で、三千院を廻つて嵐山へ。私用で大坂行のペン
公と一時別れて一行は落合より去。今度は近藤も

へさきに立つた船頭の右大左に岩を避けろ珍縁の早枝に嬉々として喜び、飛沫を浴びる度に物凄いさけび声を轟して下りました。舟からあがつての水たきには謙も近もおとなしくなるまで満腹した楊句、二日間が長かつた様にも短かへつた様にも恩はれる様な顔をして、大阪から乗つたやんと三人滑り出した。元気な三つの顔が窓の外に重なり合つたまゝ小さくなつて。

(九郎)

関西勢よ誌上に出て来い

昭和九年十一月二日午後九時四十五分東京駅発 下関行列車大近、謙、ペンと関東方決死の三勇士と乗る。是を迎へて関西軍は、関ヶ原か賤ヶ岳かと思つたら大津で待つと云ふ。待つは七本槍かト、九郎、高木、ドン、高瀬と五指を数へて二人足りない。十一月三日明治の佳節、浜大津は天一碧、空晴れて水清し。堅田は飛び唐崎は枯れ洛の地を窺ひ、瓢亭に一夜の宴を張る。一亭と云つは後で聞いたらお前達下郎の行く処ぢやない、と本當にされなかつた。

十一月四日関西軍は更に若武者十合を加へて大原に建禮門院の遺跡を偲び、嵐山に、祇園に、転戦又転戦巧みに引きまわし、たつぶりと響應して大阪秋の陣の幕は閉ぢる。こんなのは敵ながら天晴れの腕前だつた。かくで暮る、大早い京の夜関東勢理爺をはじめその一統を九時何分の東京行の汽車に手際も鮮やかに積みこんだ。西も東も知らぬ他因者を一九郎ちやんだつて知らなかつたんだぞーーかくも手際よく整くあしらつて追ひ帰した大阪軍の皆勇士は驚嘆すると共に、これ針葉樹會史上傳へて以て後世に遺すべき正直に書いては折角戴いた好意が逆效果となつて傳ふべき歴史にはお世辞が入り過ぎるし、又若し現れる憂があつて遠慮が先に立つ。あの鮮やかな手際を誇ぶ有終の美は是非関西方の筆に待たねばならぬまい。

関西勢よ。此の度の合戦記を正直に傳へてくれ。軍師真田幸村よ、その攻防秘策を語らないか。若武者木村長門守よ、健筆を齎してくれ。豪傑後藤又兵衛よ、何故その武勇傳をうたはないのだ。そして片桐旦えも、薄田夢人もみんな針葉樹誌上に

響を並べて出陣せよ。
呼ばれて敵に後を見せる軍法の御振舞はよしや
あるまいな。

編 輯 後 記

(ハニ)

先ずは新年の御慶芽出申候。去る年末の歳、
何時に度らぬ事ながら齡も一つづ、曾し、生きる
年寄のきたりと苦笑仕候。さるにても鶴は千年、
龟は万年とや古えよりの傳へなれば同じく毛物の
御身とて御一同様の御壽いよ／＼長久なるべしと
存候。ひどにいたづら事などして哀れ生け取りに
させられ見世物とする、悲運を恐れ候はゞ銘々志
を立て行を慎みワナに触れず入を闊らず御自愛御
尊一に被為遊候様申添候。

専ても新年号には、近頃流行の高級万歳とや言
へる卦合漸にも似たる関東関西の古風が舌戦、此言
の一發こそ御覧じ事なれ。但樂屋裏より正直に申
上れば、「関西勢よ、祇上に出てまい」と嘆呵を
切りしほどか手おくれの形にて候ひき。つまりは、
その歎声の起るよりも早く関西の曉將九郎判官の
鉢弓本切つて放たれしものと御承知有りたき機大
て御座候。いざれとも此よ、この戦は何時果つべ

しとも見えぬ五分の力量、假令いづれか打取られ
候失喪念と空つて現はれ候事必定大悶間、御氣永
に御服覧ありたく願上候。

クン氏は未だ学窓を出でざる現役其クンの謂にし
て其の思想の沈潜せる。其の筆致の流麗なる、
に後世怖るべき逸物に候事、御覧の如くに御座候
先月号に、ダイクトリヤ号上ネルソン提督の偉業
を偲びたる閑君の記文は未だ完結未到らざりしも
編輯の都合上ラストシーズンをカットオーフ状候誠
申訳無御座候、右御説承を又ひ併せて同君の御健
闘を祈上候。

新年に當り申上度儀は山々御座候得共、只々元
丸齋の身、況や宴會酒に酔ひして脚細胞も謀反
を起し居り候折柄、口あいて脇見するアケビの程
も如何かと存じ候間、光は御慶吉上大止の築置候
次第に御座候。

追面、一橋山西御界杆の針葉樹代金木だ御拂込
無之向は至急鈴木英旗幹事まで御送金相度候
以 上